

第2回多賀城復元整備検討会 議事録

1. 開会

○事務局（県観光戦略課）

定刻になったので、これより第2回多賀城政府復元整備検討会を開催する。開会にあたり、宮城県経済商工観光部副部長の千坂から御挨拶申し上げる。

○宮城県経済商工観光部副部長 千坂 守

本日は第2回多賀城政府復元整備検討会に御出席いただき感謝申し上げる。

前回10月の第1回検討会では、多賀城の現状や求められる役割、周辺施設の課題を事務局から説明し、委員の皆様から御意見を頂戴した。今回は、前回示せなかった復元整備の内容や宮城県・多賀城市の将来的なビジョンを示し、復元の方向性や利活用のあり方について御助言を頂戴したい。

全3回の検討会のうち第2回は、本質的な議論ができる実質最後の機会になる。忌憚のない御意見を是非頂戴したい。次回は来年2月で、復元整備計画への反映内容を中心に議論して取りまとめる予定である。本日はよろしくお願ひしたい。

2. 議事（1）前回検討会における意見について

○事務局（県観光戦略課）

それでは議事に入る。まず議事（1）の前回検討会で出た御意見について、資料の2~5ページに先月の検討会で皆様からいただいた御意見を整理した。時間の都合で個別の説明は省くので、後で御確認いただきたい。ただし、一部はさらに議論を深める必要がある項目もあるので、そちらは議事（4）の中で御意見をいただきたい。

2. 議事（2）復元により目指す姿について

○事務局（県観光戦略課）

続いて議事（2）に移る。資料6ページから、復元によって目指す姿を宮城県と多賀城市それぞれから説明する。7ページは、宮城県が目指す姿となる。政府復元を通じて歴史理解を深め、多賀城に新たな観光スポットを作り、観光客の県内滞在時間を伸ばし、広域周遊につなげて経済波及効果を高めるのが目標である。

その目的は三つある。一つ目は、古代の地方統治空間を可視化し、学校教育や生涯学習での歴史理解と体験学習を深めること。具体例としては、空間展示や体験型学習、当時の儀式再現などが考えられる。二つ目は、多賀城エリアの滞在時間を延ばすことで県全体の観光消費に波及効果を生むこと。ナイトタイムイベントや物販・飲食施設など滞在環境の整備も視野に入れる。三つ目は、多賀城を起点に塩竈や松島など県内各地を巡る滞在型観光を促進し、観光消費の拡大を図ることである。

以上が県の目指す姿の説明で、次に多賀市の目指す姿について説明をお願いしたい。

○事務局（多賀城市市民文化創造課）

多賀城市の目指す姿は資料 8 ページに示している。KGI として「日々のよろこびふくらむまち 史都 多賀城」を掲げ、最終ゴールは住み続けたい市民を増やすことである。そのため、多賀城に親しみや誇りを感じる市民を増やし、1300 年以上受け継がれてきた歴史文化への誇りを持つ市民を育てるまちづくりを進める。

さらに、観光客の入り込みを増やし、経済波及効果を高めることも目指す。歴史文化の面では、多賀城政府などを訪れる人を増やし、その本質的な価値や魅力を多くの人に知ってもらうことが狙いである。こうした取り組みを目指していきたいと考えている。

2. 議事（3）復元整備の内容について

○事務局（県観光戦略課）

それでは、引き続き議事の（3）に移らせていただく。多賀城政府跡の目指す姿について説明をお願いしたい。

○事務局（県文化財課）

多賀城政府の復元整備の目指す姿ということで、基本理念として、古代東北の政治文化の中心だった政府の往時の姿を体験できる場として復元し、歴史的価値を伝えるとともに、多様な主体による学びと交流の場、歴史探求拠点を目指す。

表現する時期は、第Ⅱ期政府の姿を統一して復元する。対象遺構は、第Ⅱ期政府の全建物や築地塀など、発掘調査で確認された全ての遺構とし、来訪者が空間を立体的に実感できるようとする。

整備の基本方針としては、①遺構保存を最優先しつつ適切に復元する、②学術的根拠に基づき歴史的特徴を正確に再現する、③伝統材料・工法を基本に安全性や耐久性を考慮し必要に応じ現代材料も活用する、④段階的かつ公開性の高い整備で地域住民や来訪者との理解と協働を深める、⑤来訪者が快適に学び過ごせる知的探求の場にする、という方針を考えている。

スケジュールとしては、今年度に整備方針をまとめ、来年度に県による大規模事業評価を実施する予定である。その後、基本計画・基本設計を行い文化庁委員会での審議も並行して行いたいと考えている。実施設計を進めつつ基盤整備と復元建物整備を段階的に行い、建物は南から第1期～第3期の順で整備する。

復元建物は古代空間の再現と情報展示を兼ね、パネルや遺物展示、体験学習の場とする。空間展示や建物の機能については、今回の検討で御意見をいただきたい。

土地の所有や整備主体、維持管理については、多賀城跡全体で約 100 ヘクタールとなる。外郭南門・ガイダンス施設は多賀城市教育委員会、あやめ園・中央公園は多賀城市都市産業部が整備し、その他の地区は県が整備している。それぞれの整備した土地は、市が公有化した土地であり、維持管理も市が担う。一体的な整備体制の必要性についても、今回御意見をいただきたい。

○事務局（県観光戦略課）

それでは、14 ページの維持管理に関して、愛媛県にある大洲城の視察結果の報告をお願いしたい。

○事務局（県観光戦略課）

15 ページから、大洲市における歴史的資源を活用した観光まちづくりの先行事例を紹介する。今年9月、事務局で視察した内容である。大洲市の代表的な歴史建造物である大洲城では、日本初の天守宿泊体験「大洲城キャッスルステイ」を実施している。

城下町は江戸から昭和にかけて古民家が立ち並ぶ街並みだったが、空き家問題が深刻化していた。大洲市は歴史資源を活用し、行政・金融機関・民間事業者が連携して古民家の保全や観光客誘致を進め、城下町の活性化を図った。その結果、古民家はショップ、カフェ、宿泊施設などに改修され、多様な活用が行われている。写真の建物は、委員の他力野氏が代表を務めるバリューマネジメント社が復元事業を手掛けた建物である。

大洲城以外にも、臥龍山荘や盤泉荘といった歴史的建造物があり、これらは指定管理業務を受託した一般社団法人キタ・マネジメントが一体的に管理している。この体制により共通観覧券を設定し、周遊観光を促進している。

大洲城と周辺施設は徒歩15~20分圏内に位置し、改修された古民家や歴史的建造物を巡る散策ルートが形成され、観光客は歩きながら多様な店舗や宿泊施設を楽しめる。

観光まちづくりの体制は、自治体だけでなく、観光地域づくり法人や金融機関、民間事業者など多様な主体が連携し、地域観光の運営を担う形で構築されている。これが大洲市の視察で得られた事例の概要である。

○事務局（県観光戦略課）

議事の(3)までの事務局説明が終了し、ここで委員の皆様から復元整備の内容に関する御意見をいただきたい。特に資料12ページから14ページ下段に朱書きで示された「御意見をいただきたい事項」を中心に議論する。他力野委員には、発言時に愛媛県大洲市の事例に関する補足説明もお願いしたい。

○他力野委員

今回の復元プロジェクトは期間が非常に長いことが、通常とは異なるポイントである。現在は基盤整備の後、第1期、第2期、第3期と順に復元する計画だが、特に第2期に予定されている「正殿」の扱いが重要だと考えている。本来は門から順に建てていく方が景観的には自然だが、長い工期を踏まえると、象徴となる建物を早期に復元した方が観光客の流れを生みやすいのではないかと考える。大洲の事例でも、天守が先に復元されたことで人の流れが変わり、体験コンテンツなどが展開できている。

大洲では、すでに江戸時代から残る重要文化財の櫓と、完全復元された天守が揃った状態からまちづくりが進められた。まちが荒廃の危機にあったため、まずDMOを立ち上げ、官民連携のファンドなどを組み合わせて10億規模の事業を構築した。経産省の支援も得ながら、30棟以上の歴史的建造物を再生し、ホテルや飲食、物販など20以上の事業者が入る形でまちの賑わいを取り戻していった。

○松澤委員

正殿を最初に着手すべきだと考えている。工期が長い中で周辺部から作り始めると、途中で集客が伸びず計画が停滞する恐れがある。人々が最終的に目指す象徴的な場所を早期に整備し、ユニークベニューなども活用しながら機運を高めていく方が、観光の観点から望ましいと考えている。

○藤澤委員

復元整備の方向性や計画自体は妥当だと考えている一方で、復元する順序については慎重に検討する必要があると思っている。中心部分を先に整備する考え方もあるが、工事の途中段階でいかに人を呼び込むかが重要だと考えており、その点を踏まえて順序を決めるべきだと思っている。また、多賀城跡では南門が大きく、これを復元すると政府が外から見えなくなる可能性があるため、復元過程をどう見せるかということも考慮すべきだと思っている。さらに、安全性や動線など工法上の条件も含めて、全体として現実的かつ総合的に判断する必要があると考えている。

また、一般社団法人キタ・マネジメントが指定管理に入っているが、文化財としての大洲城の重要な文化財の管理はどこが行っているか教えていいいただきたい。

○他力野委員

今は一般社団法人キタ・マネジメントが管理運用している。元々は文化財の保存を目的とした社団法人が大洲市の中にあり、そちらが指定管理を受けていた。まちを一体的に管理運営するという地域経営を1つの題目のもと、様々なものを集約していったが、その一環として従業員もキタ・マネジメントが吸収して管理運営をしている。

○櫻井委員

他の委員の意見と同様に、復元の順序については、南門から着手すると既存の多賀城南門と見た目が重なり、違和感があるという懸念を抱いている。そのため、まず正殿を復元し、その後に周囲の施設を整えていく方が、市民にとっても理解しやすく良い進め方ではないかと考えている。ヤード確保などの課題はあるものの、敷地が広いことを踏まえれば対応可能ではないかと思うため、検討いただきたい。

○高橋委員

建築スケジュールについては、象徴性を持つ正殿を先に復元し、その後に周囲を整備していく方が望ましいと考える。平城宮でも同様に象徴的建物を先に示す手法が取られていると感じており、多賀城でも南門をくぐった先に正殿があるという体験を早い段階で提供できる利点があるため、第2期を前倒しするということは、1つの検討事項となると考える。

さらに、復元工法や基本計画の段階では、従来の技法に加えてデジタル設計や木材加工を支援する新しい技術を活用すれば、工事不足による工期遅延を避けられる可能性がある。地域工務店の育成などにもつながるため、多面的な視点で工法や設計を検討することで、コスト・工期の圧縮余地があると考える。

また、過去に政府完成イメージをホログラムで見せた際に多くの住民が訪れた経験を踏まえ、整備の過程でも最新技術を活用して将来像を体験できる工夫を取り入れれば、住民や観光客を継続的に引きつけられると考える。

○佐藤委員

地元住民として、正殿には強い思い入れがあり、子どもの頃から親しんできた場所であることから、まず正殿を象徴的に復元してもらえると地域の想いがより形になり、住民にとってのシンボルにもなると感じている。また、これまで正殿を使ったイベントやプロジェクトマッピングなどが行われ、地域の記憶に深く残っていることを踏まえると、正殿の先行復元は住民のシビックプライドの醸成にもつながるのではないかと考えている。

○事務局（文化財課）

色々な御意見をいただき感謝申し上げる。委員の皆様からいただいた御意見を踏まえ、順番や工期だけではなく、その途中での公開ということも含めて、検討させていただきたいと思う。

2. 議事（4）多賀城政庁以外（周辺施設）の利活用について

○事務局（県観光戦略課）

他に意見がなければ、議事の（4）に移らせていただく。多賀城政庁以外の周辺施設の利活用について、前回の検討会でも議論したが、今回は多賀城政庁周辺エリアの活性化に向けて、さらに踏み込んだ御意見を委員の皆様からいただきたい。

まず1点目は、県所有の浮島収蔵庫の活用についてである。エリア全体の価値を高めるために、ここにどのような機能を持たせるべきか御意見をいただきたい。次に東北歴史博物館の取り組みについて、政庁の魅力を伝えるデジタルコンテンツ整備や、入館者を政庁へ誘導する方法など、まだできることがあると考えている。参考として、TOPPANホールディングス株式会社が制作したデジタル文化財ミュージアムの動画も紹介させていただく。迫力は伝わりにくいかもしれないが、こうしたコンテンツの例として示させていただいた。

最後に国宝多賀城碑の取り扱いについて、前回も風化防止対策の調査の必要性について御意見をいただいたが、本物の魅力をどう伝えるかの工夫についてもさらに御意見をいただきたい。

以上が議事（4）の説明となるが、ここで委員の皆様には、議事（4）に関する御意見に加え、議事（2）の宮城県と多賀城市的復元により目指す姿について、目的達成に向けた具体的な取り組みや他地域の優良事例も交えた御助言をいただきたい。

○他力野委員

まず収蔵庫については、耐震性に問題があるため、現状の建物を人が利用する形で活用するのは難しく、安全性を考えると踏み込むべきではないと考えている。一方で、収蔵物が移設されれば、土地自体は拠点性が高くなり、建物を撤去すれば更地として多賀城を見渡せる空間になるとを考えている。そうなれば、動線づくりや眺望を生かした多様な活用が可能になり、熱気球や展望タワーの設置、宿泊拠点の整備など、土地としての潜在的価値は大きいと考えている。

また、東北歴史博物館については、展示内容の質は高いものの、多賀城が本丸であるという位置づけをより明確にする必要があると考えている。そのため、館内で多賀城跡の案内や周遊のオリエンテーションを定期的に行う仕組みを設けることが有効で、展示だけでなく訪れた人が遺跡の価値を最大限に理解できるよう支える機能が不可欠だと考えている。

最後に多賀城碑については、現状では雨ざらしに近く国宝としての扱いが十分でないと考えている。そのため、既存の覆屋を外側から保護する新たな囲いを設け、案内やガイダンスを充実させる必要があると考えている。適切な保護と情報提供を両立させることで、文化財としての価値をより明確に伝えられる環境を整えるべきだと考えている。

○事務局（県観光戦略課）

他力野委員、できれば県と多賀城市が目指す姿の実現のために、具体的な取組についても御助言いただけないとありがたい。

○他力野委員

私が地域で城や歴史的施設を活用してきた経験から言うと、一番大事にしているのは地域との対話と説明責任である。地域の人々にとってこうした施設は宝物であり、自分たちのものという意識が強いため、それに触られることへの抵抗感も大きい。愛媛の大洲や香川の丸亀でも同じで、地域住民の思いを丁寧に受け止めることが必須だと思っている。

そこで私は、文化財の活用検討委員会のような合意形成の場を設けた。市長や副市長、文化財課、商工会議所の会頭、市議会議長、保存会など、多様なステークホルダーを巻き込み、合議のもとで方針を決める。実際のプロジェクトは別チームで進めるが、合意形成の場をきちんと作ることが重要である。

また、市民向けのシンポジウムも定期的に開催し、歴史的資源を活用した観光まちづくりや文化財活用について発信する。人気のある町では会場が満員になり、別室でサテライト視聴できる仕組みも作った。さらに、近隣自治会には行政職員が一つずつ訪問して説明し、本音を引き出して次に生かす。こうした丁寧な対応によって、100%の同意は得られなくても、説明責任を果たした上で前に進むことができる。

この取り組みは啓蒙やシビックプライドの醸成にもつながっており、大洲では中学生や高校生も含め、まちづくりへの関心や参画意識が70%前後と高いスコアで示されている。

○櫻井委員

まず浮島収蔵庫については、改修して資産を生かしたいという気持ちは理解できるものの、建築的には活用が難しいと考えている。耐震補強自体は可能でも、建物が政府とは逆向きに建っており、県道側に背を向けた配置が大きなネックになっている。かつて資料館として運用されていた時は問題なかったが、周辺と一体的に活用するとなると向きがネックであり、宿泊施設に転用することも不可能ではないが、コストや維持費の面で非常に負担が大きいと考えている。

東北歴史博物館については、企画展の魅力で訪れることが多いが、そこから多賀城跡へ足を延ばすのはハードルが高いと考えている。そのためレンタサイクルや電動モビリティ（LOOPなど）を活用した周遊導線を整備することが有効ではないかと思っている。また、博物館の南側アプローチは開放的な景観が魅力で、新たな建築物を設けず現状の空間性を尊重した方が良いと考えている。

デジタルミュージアムについては、導入施設として価値が高いと考えており、東北歴史博物館やガイダンス施設で積極的に取り入れることは有効だと思っている。

最後に多賀城碑については、適切な保護が必要だと考えているが、決定的な解決策は見つかっておらず、覆屋をより立派にする案も考えられるが、最適な方法は簡単には見つからないと考えている。

○高橋委員

宮城県が目指す姿に立ち返ることが重要だと考えている。多賀城の復元を通じて歴史理解を深めることは、県民の誇りやシビックプライドを取り戻す教育につながると考えており、象徴的な建物を整備することで、県民が1300年前の東北の歴史にまで立ち返れる学びを提供できると期待している。

観光面では、ナイトタイムイベントを活用して滞在時間や消費額を伸ばすことに可能性を感じている。昼と夜でターゲット層が異なるため、中央公園や多賀城南門周辺でナイトイベントを行い、若者向けやファミリー層向けに多様なコンテンツを提供することで、観光客の域内・域外の動線を分けて施策を設計すべきだと考えている。これにより、地域内外の観光効果や税金対効果をより明確に把握できると考えている。

広域周遊については、東北全体の歴史時間軸を整理する必要があると考えている。多賀城から塩竈、松尾芭蕉の時代まで、時代ごとの歴史を整理して旅行商材に組み込むことで、東北地域全体のコンテンツの価値を正しく伝えられると考えている。

また、歴史教育の方法は画一的である必要はなく、多面的に展開すべきだと考えている。実際に、子どもたちがアニメやゲームなどを通じて歴史を学んでいる事例からも、世代に応じた多様な伝え方が可能であると実感している。

施設の再利用については、宿泊施設の可能性を検討しつつ、建設的な課題やコストも考慮し、スタディツアーなどを通じて柔軟に可能性を模索することが重要だと考えている。また、体験施設は常設で整備すべきだと考えている。多賀城碑については移設が難しいが、文化的理解を踏まえつつ、政庁の一部に設置するなど、数百メートル単位での柔軟な配置方法も手段の一つとして検討できると考えている。

○藤澤委員

既存施設の活用は大きな課題だと考えている。東北歴史博物館は企画展や子ども向けイベントで多くの来館者があり、すでに努力が実っている。だからこそ、多賀城にも足を運びたくなる仕組みをつくる必要があると感じている。ガイダンス施設ができたことで、公園に車を置き、南門を見てから博物館へ行く、といった人の流れも生まれているので、現地と博物館をうまく結びつける具体的な仕組みづくりが重要だと思っている。

オルレのコースになったことで歩く時間も長くなり、途中で飲み物や軽食が欲しくなるという声も理解できる。浮島収蔵庫の活用など、建物の評価は専門外で分からぬが、こうした機能の整備は今後の課題だと考えている。また、多賀城碑は国宝であり、慎重な調査にもとづく保護が基本であると考える。

歴史理解を深め、その上で観光活用を進めるという基本方針には異存はないが、復元事業や観光活用が地元の知らないところで進むような形にはすべきでないと強く思っている。地域との対話や説明責任、合意形成は欠かせず、復元が地元や県民の誇りになることを常に意識する必要がある。地元の人が誇りを持てば、自らSNSなどで発信し、県民が共同で多賀城を支えていく流れも生まれるはずである。

私は文化財の立場の人間で、観光の専門ではないが、来訪者が増えること自体は歓迎している。大切なのは文化財の保存と、歴史・文化財活用の基本をしっかりと守ること。そのうえで、地元の人が誇りを持ち、文化財保護を自分事として続けていけることが重要だと思っている。基本線が守られていれば、観光活用のアイデアは多様であっていい。そうした形で計画が進むことを望んでいる。

○松澤委員

収蔵庫の活用については、宿泊施設への転用は私の経験から見ても難しいと感じている。飲食や物販を置く案もあるが、導線を考えると、中央公園、ガイダンス施設、そして南門へと一直線に流れるルート上に集約した方が分かりやすい。収蔵庫は近いようで実は流れを乱しやすく、ビューが特別良いなどの理由がない限り適さないと考えている。訪れる人が迷わずお金を落してくれる導線を作るには、一直線の配置が最も自然だと思っている。

中央公園に車やバスを止め、ガイダンス施設で簡単に案内を受けてから政府へ向かう流れが良い。ただしガイダンス施設自体が小さく、深い学習には向かないという印象もある。より深く知りたい人には、やはり東北歴史博物館との連携が必要だと感じている。博物館は本格的な展示があり、線路さえ渡れば距離も近く、歩車分離も難しくなさそうなので、両者をセットで観光し、移動はゴルフカートのような形も検討できるのではないかと思っている。

また、藤澤委員の指摘にもあったように、沖縄の首里城のような在り方が理想像ではないかとずっと感じてきた。地元と丁寧に対話しながら、再建される多賀城が地域のシビックプライドの象徴になる、そういう場所に育っていくことこそ目指すべきゴールだと考えている。

○佐藤委員

目指すべき姿として、多賀城を地元のシンボルとして住民が誇りに思えるようにすることが重要だと考えている。そのためには、住民自身が「自分ごと化」することが必要で、教育や住民向け説明会、シンポジウムなどを通じて理解を深め、子どもたちにも歴史や文化を伝えていくことが大切だと思っている。

同時に、観光客の増加も進めるべきだと考えており、オルレの認定コースなどを通じて地域に人が訪れる実感を体験する体験は非常に有意義だと思っている。私は、地域で採れたものを販売するエイドステーションなどの取り組みを通じて、観光体験が地域の生業や新たな価値に繋がることを期待している。ただし、普段は静かな地域に観光客が増えることで、住民の生活への影響や違和感も生まれるため、観光と住民生活が共存できる環境づくりも重要だと考えている。

さらに、博物館から多賀城跡への移動手段としてモビリティサービスを導入することで、高齢の住民も便利に活用でき、観光客は有料、地域住民は無料で利用できる仕組みを整えることが、観光客と生活者の共存に役立つと考えている。私は、こうした取り組みを通じて地域全体の価値を高め、持続可能な観光と地域の誇りを両立させていきたいと思っている。

○事務局（県観光戦略課）

一通り皆様から御発言をいただいたが、更になお、県や市が目指す姿をよりよく実現していくために、更なるアドバイスをお願いしてもよろしいか。

○櫻井委員

県民や市民を早いうちから巻き込むことが重要だと思っている。ワークショップなどを通して、市民に自由に意見を出してもらいたい。荒唐無稽なものでも構わない、率直なアイデアができるだけ集めたい。意見をすぐ採用するかどうかは別として、とにかく参加してもらって、“自分たちで一緒に作っていく”という機運を早く醸成したい。説明会のように一方的に話す形ではなく、「皆はどう考えるか」と問いかけて意見を引き出すスタイルのほうが、参加者によく伝わるし、その後の成果にも大きく影響すると考えている。そのため、この方法は是非取り入れたい。

○事務局（県観光戦略課）

本日の全ての議題を通して、再度ご発言いただくことは可能か。

○他力野委員

私は、今進めている多賀城の取り組みや今後の計画について、地域内外の人々を巻き込む仕組みづくりが非常に重要だと考えている。具体的には、義務教育の中で中高生に地域のまちづくりに触れる機会を提供したり、大学生にはまちづくりプロジェクトを研究テーマとして取り組んでもらったり、インターンシップで「まちづくりバリューチェーン」を一気通貫で体験してもらったりしている。社会人向けには講座やラボを通じて知識伝承と実践の場を提供し、全国から参加してもらえるようにすることで、多賀城再生のプロセスを多角的に体感してもらえるようにしたいと考えている。

そのためには、復元チームと並行して、プロセス全体を運営する官民連携の推進チームを組成することが最も重要なと感じている。また、多賀城や東北の地域的役割を地元の人には深く理解してもらい、全国の人には歴史的背景を分かりやすく示すことで、多面的な価値を伝えることが大切だと思っている。地元の人と外部の人、それぞれの巻き込み方は異なるので、両面からのアプローチで理解促進を図り、それを体験価値に変えていく設計を作ることが、今後の多賀城再生における非常に重要なポイントだと感じている。

○事務局（県観光戦略課）

今御意見いただいた、地元の方の巻き込みという視点で佐藤委員から御意見をいただけないか。

○佐藤委員

ワークショップのような手法がとても有効だと感じている。住民の多くは、農家の方などワークショップに慣れている人は少ないが、外部の人も交えて意見交換の場を設けることで、住民の意見が活性化すると考えている。説明会のように一方的に話すだけでは、意見も出にくく、理解も深まりづらい。だからこそ、ワークショップ形式で「皆はどう考えるか」を問いかけ、忌憚なく意見を引き出すことで、地域の人たちが主体的に関わる機運を早い段階で生み出したいと思っている。

○高橋委員

(3) の④に関してだが、まだ意見が十分出せていない部分があると思うので補足したい。今考えるべきは、多賀城を復元する時点だけじゃなく、50年、100年という長いスパンで、その象徴的な場所に何が起こるかを見据えることである。多賀城単体ではなく、それを支えるエコシステムの両方が必要だと思う。作ったら終わりではなく、維持や大工の育成なども含めて考えないといけない。

成功例として南砺市井波の瑞泉寺の門前街の事例がある。職人の弟入り宿を運営して、文化継承と古民家再生を結びつけて町全体のエコシステムを作っている。こうした形で、復元後の多賀城も地域の価値を下げずに維持できる仕組みが必要だ。住民の誇りや不動産価値の維持、地域経済への貢献なども視野に入れた長期的なマネタイズの仕組みを作るべきだと思う。

多賀城を価値ある学びの場として位置付け、町全体の価値向上と結びつける戦略が必要で、市や県だけでなく民間も巻き込んだ体制が望ましい。その上で、誰に何を伝えるのかを明確にした広報戦略も重要である。宮城県や松島など、広域的にどうブランドを伝えるかも整理すべきで、民間の柔軟な発信力を活用しつつ、行政がそれをサポートする仕組みを作ることが必要である。

3. 閉会

○事務局（県観光戦略課）

それでは、以上をもって、本日第2回検討会を終了する。なお、次回の第3回検討会は年明け2月10日火曜日14時からを予定している。詳細については別途事務局から案内させていただくので、よろしくお願いしたい。